

### 3. 学内におけるボランティア活動の実践と参加のきっかけの提供

ボランティア・NPO 活動センターでは、学生スタッフが中心となり、ボランティアの第一歩となるような活動や啓発の場を提供しています。センターでは、日常的、定期的に行えるボランティアを数多く紹介、また、学生が社会の課題に気づけるようなイベントを実施して、ボランティアの裾野が広がることを目的として活動しています。

事業名	リユース傘貸し出しプロジェクト（深草）
実施日	2015年4月1日（水）～2016年3月31日（木）
場所	ボランティア・NPO 活動センター 深草キャンパス事務室内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
利用者数	延べ241名
企画メンバー （学生スタッフ）	山本 翔（経済3） 永田紗英（政策3） 木谷翔太（経済3） 中村太紀（経済3） 黒瀬智加（経済3） 大家彰文（国文2） 田中敬子（法学2） 永翁ふみな（文学2） 米山真奈美（政策2） 高野喜暉（経済2） 江上春菜（経営1） 山田真己（経済1） 江島美紀（文学1） 矢野龍平（政策1） 長田雄大（経済1）

#### 1. 経緯・目的

リユース傘貸し出しプロジェクトは、にわか雨など突然の雨が降った際、傘を持ってくるのを忘れた学生や教職員に傘を貸し出す。落し物の傘を再利用することで、学生や教職員が雨に濡れるのを防ぎ、傘を貸し出す際に、ボランティア・NPO 活動センターの広報を行うことで知名度の向上を図る。

#### 2. 概要

##### (1) 貸し出しの流れ

- ①センターに傘を借りに来た方に学生証を提示してもらい、学生に貸し出し用の傘の中から借りたい傘を選んでもらう。
- ②学生スタッフが傘の貸し出し表に日付、利用者の学籍番号、氏名、貸し出す傘の個体番号を記入する。
- ③返却が遅れた場合の為に、利用者に電話番号を貸し出し表に記入してもらう。
- ④学生スタッフが貸し出しの期日が貸し出し日から一週間後であることを伝え、その日までに返却いただけるように説明する。
- ⑤ボランティア情報等の広報を行う。

##### (2) 貸し出し用の傘について

当プロジェクトで使用する傘は本学学生部に届けられた落し物の傘である。持ち主が見つからないまま一定の期間保存され、引き取りの見

込みが無くなったものを提供していただいている。これらの傘に学生スタッフが個体番号テープを貼り、貸し出し用の傘としている。

##### (3) 期日を過ぎても傘の返却がない場合

一週間を過ぎて返却されなかった場合は、こちらから利用者に連絡する。3日以内にセンターに返却いただくように伝える。リユース傘を失くした場合は代用の傘を持参することになっている。

※傘を人に盗られた、不慮の事故により傘が壊れた等の理由で返却が不可能となった場合はセンターに相談する。

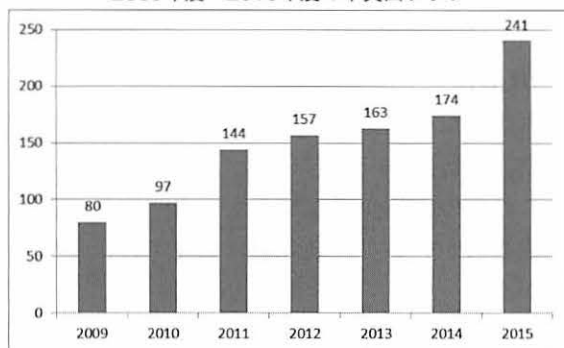
#### 3. 広報方法とリユース傘貸し出しデータ

(1) 広報方法…立て看板を21号館前に設置、広報誌ボラゴンに記載、ポスターやチラシを掲示

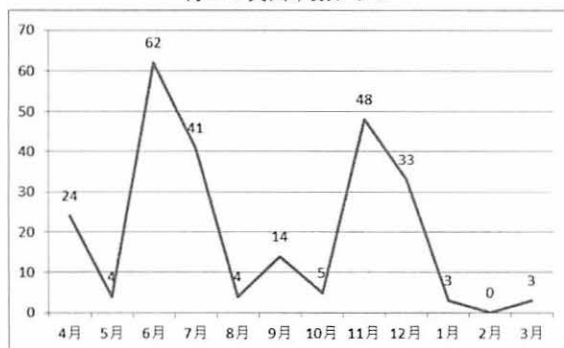
##### (2) リユース傘貸し出し実績

2009年度（11月～3月）… 80名  
2010年度（4月～3月）… 97名  
2011年度（4月～3月）… 144名  
2012年度（4月～3月）… 157名  
2013年度（4月～3月）… 163名  
2014年度（4月～3月）… 174名  
2015年度（4月～3月）… 241名

2009年度～2015年度の傘貸出グラフ



月々の貸出本数グラフ



#### 4. 企画メンバーの声・得られた効果など

- ・昨年度よりも利用者が増えた。
- ・傘の貸し出しと同時にセンターの広報を行うことになっているが、上手くできている学生ス

タッフと傘貸し出し業務しかしていない学生スタッフがいた。

- ・昨年度から利用者が大きく増え、センターの知名度が向上したことが伺える。
- ・月により利用者に大きな変動がある。

#### 5. 学んだこと・今後の課題

昨年度から力を入れて行ったプロジェクトの広報活動により、貸し出し本数が大幅に上昇した。それに伴い、センターの知名度アップに貢献できていると思われる。傘の貸し出し業務の際にボランティア情報等の広報活動も加えて行ったが、この広報によりボランティアをする学生が増えるなどの具体的な成果が今のところ目に見えて現れていない。今後、傘を借りに来た来室者をいかにコーディネートへつなげるか、ボランティア活動へつなげるかが重要な課題である。

#### 6. 経費

なし

〈報告者：山本 翔〉

事業名	深草広報誌「ボラゴン」の発行
配布期間	2015年4月1日（水）～2016年3月31日（木）
場所	深草キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）学生スタッフ広報班
企画メンバー （学生スタッフ）	田中奏多（文学4） 森本浩司（文学4） 山口 駿（文学4） 小田美紀（文学3） 小山由貴（法学3） 中北 梢（文学3） 平鋪真子（法学3） 新川貴大（法学2） 石川真帆（法学2） 大矢誠志（法学2） 百済圭吾（経済2） 橋本望海（法学2） 南山裕紀（政策2） 山本真弘（国文2） 伊藤万莉（経営1） 原 弘樹（経済1） 松坂智彰（政策1）

#### 1. 経緯・目的

広報班では、センター（深草）の学内での認知度向上のため、学生スタッフならではの目線で広報誌を作成、発行している。

センターでの活動や企画を掲載することで、本学学生にセンターを知ってもらうきっかけを作り、ボランティアに興味を持ってもらい、センターへの来室を促す。また、ボランティア関連の特集記事では、広報班員がボランティア情

報等を自ら収集することで、自分自身の勉強に繋がり、コーディネートに活かすことができる。

#### 2. 概要

- 春号（配布：100部、前年度冬号1500部も配布）  
「1ページめくってごらん 春から君もボランティア」
- ・センター紹介
- ・センターの使い方

- ・学生スタッフ紹介(2・3回生各1ページずつ)
- ・学生スタッフボランティア体験談

●夏号(配布:400部)

「ボランティアコーディネート」

- ・コーディネート
- ・環境分野紹介
- ・福祉分野紹介
- ・地域活動紹介
- ・野外活動紹介

●秋号(配布:500部)

「ボランティアの多様性」

- ・学生スタッフ企画告知(龍谷祭展示)
- ・センターのSNS紹介
- ・ボランティア体験談
- ・ボランティア団体紹介(うつくしまランチ)

●冬号(配布:300部)

「頑張る人々!!」

- ・センターのSNS紹介
- ・ボランティアを頑張る人々たちの紹介  
(アビリンピック、京都マラソン、東北支援)

※合計2800部配布(昨年度冬号含む)

3. 参加者の声・得られた効果など

- ・本学学生が広報誌を受け取ったことをきっかけにセンターへの来室があった。また、広報誌の内容への問い合わせなど、効果があった。
- ・記事作成期間を明確にし、記事執筆者と編集者が期限を厳守することで、配布までの流れがスムーズになり、昨年度より発行部数を増やすことができた。
- ・センターに置いてある本や公式HPなどを利用して広報誌の記事内容を充実させた。作成に当たって学んだことをコーディネートに活用できた。
- ・広報誌作りのために、他団体、他大学の広報誌を自主的に研究するようになった。またパソコンでの作業が以前と比べて得意になっ

た。

4. 反省点

- ・表紙の絵や記事内の挿絵が手書きであることや、記事作成がパソコンでの作業となるので、これらの作業が得意な人がいる半面で、不得意な人がいる。作業分担に偏りや作業量に差が出る。
- ・記事作成から配布までの期間が長いと、班員のモチベーションが低下することがある。
- ・記事執筆者、編集者、印刷係など作業を分担するため、仕事量に差が出る。長期休暇に活動しようとするともーティングの回数が減り、情報共有が難しくなる。

5. 学んだこと・これからの課題

- ・一方的に発信する広報誌は成果が見えにくいですが、広報誌をきっかけにセンターへ来室する人や、広報誌に関する問合せがあり、効果がうかがえる。
- ・発行号によってはミーティングのみ参加する班員もいたため、全員が広報誌作成に関わり、仕事量をまんべんなく振り分けるようにしたい。
- ・記事を書く回数を増やすことによって、趣旨やテーマに合った適切な表現で伝えられるようになる。また、ボランティアに無関心な人たちにも興味を引くようなインパクトのある広報誌作りを目指したい。
- ・班員自らが率先して配布をし、学内の様々な人たちに手に取ってもらう機会を増やしていきたい。

6. 経費

消耗品(A4用紙) 1,298円

〈報告者:中北 梢〉

事業名	瀬田広報誌「Volunteer News」の発行
配布期間	2015年4月1日（水）～2016年3月31日（木）
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（瀬田）学生スタッフ広報班広報誌係
企画メンバー （学生スタッフ）	小川菜緒（社会4） 小林陽太（社会4） 仲田匡志（社会4） 福田七海（社会3） 清水謙太（社会2） 田村奈生（国文2） 長友沙樹（社会2） 佐久間涼（社会2） 福山真琴（社会1） 山本加奈（社会1） 仲上昂希（理工1）

## 1. 経緯・目的

センター（瀬田）では、センターの活動や企画、また学生スタッフのボランティア体験を親しみやすく記事にし、学生スタッフの目線ならではの広報誌をセンター学生スタッフの活動として、2009年度より発行している。

広報誌を配布することで、ボランティア・NPO活動センターの本学学生や教職員への認知度を高めるとともに、当センターへの来室者の増加を目指し、ボランティア啓発を行うことを目的としている。

## 2. 概要

### ●春号（2000部発行）

配布時期：4/2～4/6、4/14、4/15、4/21、4/23

内容：センター紹介、学生スタッフ紹介  
学生スタッフ募集

### ●夏号（700部発行）

配布時期：7/13～7/17

内容：センター紹介、花火大会&ボランティア情報  
ボランティアの心得、暑さ対策

### ●秋号（600部発行）

配布時期：10/22、10/23、10/26、10/27

内容：ボランティア啓発企画の紹介、センタークイズ  
秋冬ボランティア情報

### ●冬号（500部発行）

配布時期：1/6～1/8、1/12

内容：センター紹介、ボランティア紹介  
学生スタッフのお雑煮特集  
くさつ子どもフェスタ2016の紹介

### ・その他（手配り以外）

ボラセン会議・説明会・パンフレットスタンドで配布。

### ○設置・配布場所

センター（瀬田）や、学友会パンフレットスタンドに配架、学生スタッフによる手配りで配

布した。

## 3. 参加者の声・得られた成果など

- ・記事に学生スタッフの情報を載せることで、センターや学生スタッフの存在を知ってもらえた。
- ・広報誌を見てセンターの存在を知った学生や広報誌を見て来室した学生もいた。また、昨年よりも配布部数が増え、多くの人に広報誌が行き渡り、センターの認知度向上に貢献できていると思う。

## 4. 反省点

- ・昼休みの手配りの際に、シフトに入る学生スタッフが年間を通して少ないため、学生スタッフ全員が広報誌の役割を考え取り組んでいくことが課題として残った。

## 5. 学んだこと・今後の課題

- ・広報誌の作成の際に、役割分担をし、個々が記事作成をして、各ページの確認をしていましたが、1つの冊子となることを踏まえ、統一感を持たせる作成を心がけることができた。
- ・今年から広報誌を手配りする際の「アドバイスシート」を学生スタッフに配布することで、学生スタッフのモチベーションアップにつなげることができた。また、広報誌の中に、学生スタッフ一人一人がおすすめの記事を持つことで、手配りの際に、ただ渡すだけではなく直接ボランティアやセンターの紹介をし、多くの学生に手に取ってもらえる工夫ができた。
- ・センターの認知度向上のためにも、広報誌以外にもSNSを学生スタッフが積極的に広報の方法として活用していくことが必要である。広報班の1つである広報誌係がその先頭に立ち、学生スタッフ一同これからも努力していきたい。

## 6. 経費

消耗品（A4用紙、色鉛筆） 5,568円

〈報告者：福納 知香〉



事業名	ボランティア募集团体合同説明会2015
日時	2015年7月3日（金）、7月10日（金）12時15分～16時00分
場所	深草キャンパス 22号館107教室
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
来場者数	152名
企画メンバー （学生スタッフ）	藤原恵太（文学3） 中北 梢（文学3） 松本健太郎（文学3） 串 祐季（政策3） 永田紗瑛（政策3） 今井夏帆（政策3） 小山由貴（法学3） 藤岡 舞（経済2） 田中敬子（法学2） 新川貴大（法学2） 米山真奈美（経営2） 上野 翼（経済2）

## 1. 経緯・目的

ボランティア募集をしている団体に大学に来ていただき、それぞれの団体が夏休みに募集しているボランティアについて一般学生及び教職員に直接説明していただく機会をつくる。

ボランティア募集团体と学生が直接話をすることで、ボランティアに参加しやすくする。

学生スタッフがボランティア募集をしている多くの団体と新たに関係を構築する。

16：30～17：00 団体間交流タイム

17：00～17：10 アンケート記入

## ④参加団体

【7月3日（金）：9団体】

- ・特定非営利活動法人 洛中洛外
- ・一般財団法人 京都 YWCA
- ・小倉山百人一集の会
- ・MMK サークル
- ・びわこ学園医療福祉センター（野洲・草津）
- ・びわこてらこや
- ・動物愛護団体 エンジェルズ
- ・一般財団法人 京都 YMCA
- ・湖南省国際協会

【7月10日（金）：6団体】

- ・京都市砂川保育所
- ・公益財団法人 京都市ユースサービス協会
- ・特定非営利活動法人 山科醍醐こどものひろば
- ・伏見をさかなにぎっくばらん
- ・天津障がい児ホリデースクール南C
- ・社会福祉法人 北摂杉の子会

## 2. 概要

## ①参加団体決定まで

センターに登録いただいている団体のうち56団体へ合同説明会の参加呼びかけをしたところ、21団体より返信があった。企画メンバーで企画趣旨・地域などを検討し、17団体に参加していただくこととなった。（うち2団体は諸事情により欠席）

## ②参加団体への事前訪問・施設見学

12団体への施設見学を実施した。

## ③当日の流れ

- 10：45～11：30 会場準備
- 11：45～11：50 団体受付
- 12：15～16：00 本番
- 16：00～16：30 片付け、交流会準備

## 3. 参加者の声・得られた効果など

## ①参加学生からの声

- ・ボランティアの種類がすごく豊富なことを

はじめて知ることができた。

- ・行ってみたいボランティアをたくさん見つけることができた。
- ・直接、団体の方とお話することで多くの情報を得ることができた。この説明会の意義が分かった。
- ・説明が丁寧で、分かりやすく話しやすかった。会場内の雰囲気もよかった。

#### ②参加団体からの声

(説明会)

- ・参加者が非常に熱心に話を聞いてくれて、やりがいがあった。
- ・実際に新規ボランティアの申し込みをしてもらった。参加して良かった。
- ・時間によって来場者数にかなり差があった。
- ・来年度もこのような企画を開催してほしい。また、他のキャンパスでも開催してほしい。

(交流会)

- ・同じ分野の団体の方と交流する時間があり情報や悩みを共有できた。
- ・様々な分野の団体の方とお話できて、とてもいい経験になった。

#### ③学生スタッフの声

- ・受付の手が空いているときにブースで話を聴くことができた。活動にとっても共感でき、コーディネート勉強になった。
- ・授業前広報でのチラシ配りが難しかった。
- ・事前訪問をして、団体の活動を直接現場で知ることができた。

#### 4. 学んだこと・今後の課題

##### ①学んだこと

- ・この企画はボランティア募集团体の方に協力していただいていたほうがうまくいく。来

ていただく団体のことを考慮して早め早めに動き、連絡をしっかりと取ることが大切だと感じた。

- ・本番までの準備が多いので、役割分担や締め切り期限などを徹底して準備した。いろいろと調整する中で学ぶことが多かった。

##### ②今後の課題

- ・この企画を通してボランティア募集团体の方とできた関係を、これだけで終わらせるのではなく継続的につなげていくともっとよい企画になると思う。
- ・現状では実際にボランティアに行ってもらえたのか確認できないので、参加の有無や、企画の効果を測れるような方法を考える必要がある。
- ・事前の広報活動として、チラシ配り・授業前広報・SNSを利用したが、参加者をもっと増やせるように広報方法を検討していくことが今後の課題である。

#### 5. 経費

消耗品

(マッキー、養生テープ、色画用紙) 4,212円

〈報告者：藤原 恵太〉



事業名	Let's ボランティア ～ボランティアしようよ♪～
日時	①5月18日(月)～20日(水) 昼休み ②7月6日(月)～7月7日(火)、7月15日(水)～7月16日(木) 昼休み ③10月5日(月)～10月6日(火)、10月8日(木)～10月9日(金) 昼休み
場所	瀬田キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	来場者数 209名 (①67名、②75名、③67名)
企画メンバー (学生スタッフ)	中川真実(社会3) 西村若奈(理工3) 小牧裕美(社会3) 後藤和成(理工2) 首藤諭志(理工2) 藤村一樹(社会1) 多田涼太(理工1) 松澤宏紀(理工1)

## 1. 経緯・目的

人目につきやすい所にブースを設けボランティアを紹介することで龍大生・教職員がボランティアに触れる機会を作り、一歩踏み出すきっかけを提供する。センターに入りにくい人、センターを知らない学生・教職員へボランティアを紹介する機会を作る。

この企画は、2010年より続く継続企画である。

## 2. 概要

瀬田キャンパス内でセンター外の人目につきやすい所に机やホワイトボード等を用いてブースを設置し、ボランティアコーディネートをを行い、ボランティアやセンター事業への参加、センターの利用を呼びかけた。

また、新しい試みとしてブースに配置するチラシを種類ごとに設置していたのをまとめて冊子にした。

### ①5月18日(月)～20日(水) (3日間)

入学直後の新生生を中心に、ボランティアやセンターの存在を知ってもらうとともに、センターを広報し、今後の利用につなげることを目的に活動した。

春は新しいことに挑戦する人が多いと考え、初めてでも行きやすいボランティアを中心に紹介した。



場所:樹心館前、食堂前テント下(18日、19日のみ)  
来場者:67名

また、開催当時にネパールで発生した大地震への募金活動も、Let's ボランティアの活動と並行して行った。学生スタッフが呼びかけ、学生が募金活動に参加してくれた。

### ②7月6日(月)～7月7日(火)、7月15日(水)～7月16日(木) (4日間)

普段は忙しい学生や何かに挑戦したい学生に対し、夏休みに参加できるボランティアを中心に紹介した。また、学生企画である大津祭と連携して広報を行った。

7月6日には大津祭の広報のために特定非営利活動法人大津祭曳山連盟の3名にお囃子の演奏を行っていただき、たくさんの学生に関わってもらうことができた。また、7月7日の開催では、そでふれよさこいサークル華舞龍と連携して広報誌を配ってもらい、つながりをより深めることができた。

○場所:食堂前テント下、樹心館前(6日、15日、16日のみ)

○来場者:75名



### ③10月5日(木)～10月6日(火)、10月8日(木)～10月9日(金) (4日間)

気候がよくボランティアに参加しやすいこの時期にぴったりな秋ならではのボランティアを

紹介した。また、今季は開催日程を2週間にしたことから、前半を終えて活動を振り返ることができた。そして、シフト人数や一般学生が少なかったために8日、9日は開催場所を一か所に変更して行った。さらに、学生企画であるボランティア啓発企画と連携して広報を行った。

○場所：食堂前テント下、樹心館前（5日、6日のみ）

○来場者：67名



### 3. 参加者の声・得られた効果など

#### ①学生スタッフの声

- ・学生への声のかけ方が難しかった。（5月）
- ・大津祭曳山連盟と連携することで、ボランティアについて知ってもらえたとし、Let's ボランティアのブースのアピールにもつながった。（7月）
- ・途中で場所が一箇所が変わって、ブースの雰囲気明るくなったと思った。（10月）
- ・学生への呼びかけ方に慣れて、積極的になってきた。（10月）

#### ②得られた効果

- ・秋のLet's ボランティアでは4日間の開催日を2日間ずつに分け、途中で前半の活動の振り返りをしっかりと行い、その学びを後半に生かすことができた。
- ・また、年間を通してブースに配置する各チラシを冊子にしたことで、来場者がすぐにボランティア情報を受け取ることができるように

なり、ブースへの来場者が多い時にも学生スタッフが対応しやすくなった。

- ・ボランティアチラシの配布数をカウントすることで、人気のある分野の調査を行った。その結果、子ども・動物・環境・まちづくり分野のボランティアが特に人気があると分かった。
- ・期間外に来室した学生から「Let's ボランティアを見て来ました。」という声をいただきセンターの広報につながっていることを実感した。

### 4. 学んだこと・今後の課題

- ・5月のLet's ボランティアでは、学生有志とともにネパール募金活動を行なった。Let's ボランティア係として、臨機応変に対応し、うまく平行実施できたと考えている。
- ・7月のLet's ボランティアでは、他サークルと連携して呼び込みをした。それにより、つながりがより深まり、相互に活動内容を理解することができた。今後、そでふれよさこいサークル華舞龍だけでなく、他サークルと連携して活動することも考えていきたい。
- ・今年度は、国際文化学部の移転、農学部が新たにできたことを考慮し、紹介するボランティアを選定した。しかし、配布できたチラシの集計は行っていたが、学部ごとの分野人気調査は行っていなかったため効果が分からなかった。今後は集計だけでなく、学部ごとの人気調査をどのように実施していくか検討していきたい。

### 5. 経費

消耗品 5,516円

〈報告者：松澤 宏紀・小牧 裕美〉



事業名	深草龍谷祭への模擬店・展示の開催
日時	2015年10月30日（金）～11月1日（日）
場所	深草キャンパス
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
来場者数	1日目 189名、2日目 381名、3日目 320名 合計890名
企画メンバー （学生スタッフ）	田中奏多（文学4） 石野遼平（文学3） 藤野優祐（経済3） 山本 翔（経済3） 松本健太郎（経済3） 岩本奈子（法学3） 余根田敦（国際3） 田ノ上優光（文学2） 橋本望海（法学2） 田中敬子（法学2） 百済圭吾（経済2） 春名亮佑（経済2） 高野喜暉（経済2） 上野 翼（経済2） 梅村愛香（国際2） 田村奈生（国際2） 山本真弘（国際2） 大家彰文（国際2） 南山裕紀（政策2） 永翁ふみな（文学2） 津田莉沙（経済2） 新川貴大（法学2） 石川真帆（法学2） 大矢誠志（法学2） 馬庭颯斗（経済2） 米山真奈美（経営2） 藤岡 舞（経済2） 原弘 樹（経済1） 鴻池 遼（経済1） 坪下大介（文学1） 江上春菜（経営1） 藤原 純（文学1） 延安美菜（文学1） 乗矢隆良（政策1） 松坂智彰（政策1） 西山大樹（政策1） 矢野龍平（政策1） 山田真己（経済1） 江島美紀（文学1）

## 1. 経緯・目的

### 〈展示〉

今年度は、「ボランティアの多様性」について伝えることによって、実践に移すきっかけになるような内容を展示した。この展示での「多様性」とは、「自由な発想による個人の意志によって活動することにより、枠にとらわれず幅広い活動ができる」という意味である。この展示を通して来場者の方に、ボランティアの意味、さらに社会問題について考え、身近な問題として捉え、行動を起こすことの重要性について伝え、「きっと、自分にもできることがある」と考え、ボランティアを行うきっかけがどこにでもあるということに気づいてもらうことを目的としている。

### 〈模擬店〉

ポテトを販売し、売り上げを福島で子育て支援を行っている団体「はみんぐBird」へ寄付する。一昨年の模擬店での寄付先でもあり、つながりを風化させないため、この団体へ寄付することを決めた。龍谷祭の間は、金銭を扱うので一人一人が責任感を持ち、龍谷祭の活性化に努める。三日間を通してチームワークを深める。

## 2. 概要

### 〈展示〉

内容：今回の展示では、大きく分けて2つのブース「ボランティアの多様性」と「ボランティア・NPO 活動センター」について伝えるブースを作った。また2本の動画を作成し、放映した。

- ・企画担当メンバーが紹介する団体を訪問し、その情報を基にして展示物を作成した。団体の選定については分野の偏りが出ないように配慮した。

#### ○団体訪問先（順不同）

砂川保育所、深草児童館、京都市都市緑化協会、伏見青少年活動センター、南青少年活動センター、東山青少年活動センター、山科青少年活動センター、京エコロジーセンター、竹と緑、MMK サークル、プラネット、きょうといのちのネットワーク、稲荷の家ほっこり、近江八幡市余暇支援くらぶ「はちの子」、伏見区役所深草支所、アクセス、伏見エコライフプロジェクト、洛中洛外

#### (1) ボランティアの多様性

- ・ボランティアへの入口（きっかけ）を紹介し、伝えることで学生のボランティアに対する意識の変化や「知る」ということの大切さについて理解することをテーマにして展示物を作成した。
- ・企画担当メンバーを5つのグループにわけ、それぞれが、ボランティアにおける「多様性」について伝えるブースを作成した。
  - ①社会問題：ボランティア団体の設立背景を社会の問題や現状と関連づけて展示した。社会問題や社会貢献に興味や関心のある学生にボランティアへの興味をもってもらうためのブースにした。
  - ②好きからはじめる：自分の好きなことや興

味のあることから始められるボランティアについて展示を行った。

- ③何かしたい人に向けて：とりあえずなんでもいいからしてみたいという人やなにかしてみたいが何をすればいいかわからない人に向けての展示を行った。
- ④学生スタッフの声：実際に訪問した団体やボランティア参加を行った企画メンバーの感想を展示した。
- ⑤その他：ボランティア風景の動画と心理テストを作ることで楽しい雰囲気を作った。硬いイメージを和らげるためのコーナーを作成し、幅広い年代の来場者に対する展示を行った。

## (2) ボランティア・NPO 活動センター

- ・センター事業（体験プログラム・復興支援など）
- ・学生スタッフの役割（シフト・班活動など）
- ・センターの基本情報（開室時間・場所など）

### 〈模擬店〉

3種類の様々な味付けのポテトを販売し、その利益を寄付する。笑顔で販売することを目標とした。

## 3. 参加者の声・得られた効果など

### 〈展示〉

#### ●来場者の声（アンケートより）

- ・多様なボランティアについて知ることができた。
- ・クオリティが高かった。
- ・顔抜けや心理テストなど楽しかった。
- ・広く空間をとっていたので移動しやすく模造紙も見やすかった。
- ・スタッフの説明がわかりやすかった。

#### ●企画担当メンバーの声

### （事前準備）

- ・展示物制作の段階ごとの期限を設け、期限を早めに設定していたことによって直前で焦ることがなかった。
- ・上回生だけでなく一回生も発言しやすい雰囲気、みんなで協力しあうことができた。
- ・マニュアルがあったので動きやすかった。

### （当日）

- ・手の空いている人によるチラシ配布や呼び込みが積極的に行われていた。
- ・中央に広いスペースを設けていたので来場者

の交流スペースになってよかった。

- ・自分の体験や自分の思いを人に伝える良い機会になった。
- ・幅広い年代層に楽しんでもらえる内容になっていないことが去年の課題だったので、その問題にアプローチできた。

### 〈模擬店〉

ポテトにいろいろな食感があって斬新だったと購入者から意見をもらった。子どもたちや保護者への、接客を通してコミュニケーション力のアップに繋がった。また、学生スタッフが一致団結して声を上げて笑顔で売り込みをすることができ、購入者数の増加と龍大生とのコミュニケーションにつなげることができた。しかし、調理機材の故障などにより、当初目標としていた売上げには届かなかった。

売上げ約400食、売上金60,000円、材料費等50,000円、純利益10,000円（はみんぐBirdへ寄付）

## 4. 反省点

### 〈模擬店〉

調理機材の故障のため、調理が間に合わず販売を断ったお客さんもいたため、調理ストックを作っていつでも販売できるようにすべきだった。客足が途絶えた時の広報を工夫し、購入しやすいように、列の配置などを工夫すべきだった。

### 〈展示〉

マニュアル、事前打ち合わせだけに頼るのではなく、臨機応変に対応する柔軟さが必要だと思った。

## 5. 学んだこと・今後の課題

### 〈模擬店〉

次回からはトラブルを想定して、たとえ不要であっても準備しておくことが重要だと学んだ。

### 〈展示〉

情報共有と、展示物の誤字脱字や内容のチェックを徹底し、学生スタッフ一人一人にあったフォローアップ体制を考えるべきであった。

展示物など余裕を持って準備する必要がある。

## 6. 経費

## 展示経費

消耗品(模造紙、画用紙、ペン、養生テープなど)

8,347円

模擬店経費については、売り上げから支出

〈報告者：百済 圭吾(模擬店)、

藤岡 舞(展示)〉



事業名	瀬田龍谷祭への出展 響心 ～明日へつながる扉～
日時	2015年10月24日(土)、25日(日)
場所	瀬田キャンパス 3号館206教室(展示)、体育館付近(模擬店)
実施主体	ボランティア・NPO活動センター(瀬田)
参加人数	来場者数186名(24日:89名 25日:97名)
企画メンバー (学生スタッフ)	中原 茜(社会2) 小川菜緒(社会4) 野中美華(理工3) 後藤和成(理工2) 長友沙樹(社会2) 藤澤昂也(理工2) 渡邊祐斗(理工2) 多田涼太(理工1) 森岡尋仁(農1) 矢野佑磨(理工1)

## 1. 経緯・目的

私たち学生スタッフは、日々の活動を通して、龍大生が「ボランティアは特別な人だけがするもの」「時間のある人がするもの」など、ボランティアに対して堅苦しいイメージやステレオタイプな考えを持っていたり、そもそも無関心な学生がいたりすることを知った。また、私たち学生スタッフと龍大生の間にはボランティアに対するイメージの違いがあることに気がついた。そこで、龍谷祭という多くの学生や地域の人々が集まる機会を利用し、ボランティア啓発を行い、来場者にボランティアに対する新しい発見をしてもらうとともに、センターの広報を行う。

今年のキーワードを「共感」とし、今回の展示で視野を扉に見立て、会場の展示を見たり、体験したりしてもらうことで視野を広げもらう。そして、学生スタッフは龍谷祭で、来場者自身の心に響いたことを展示を通じて来場者と共感し合えるように働きかける。

さらに、この学園祭に学生スタッフ全員で関わることで、学生スタッフ自身のボランティア観を見つめ直す機会、社会問題への興味・関心・理解を深める機会、個々の想いや考えに共感し合う機会を作り、今後の活動に活かしていく。

## 2. 概要

〈展示〉

- ・ボラセンへの扉(センターの紹介)  
センターの紹介、学生スタッフ、学生企画、センター事業について紹介
- ・ボランティアへの扉(ボランティア紹介)  
YES/NOチャートを用いて興味のある分野を引き出した後、チャートの結果に沿ったボランティアを紹介。センターの登録団体のうち4団体(京都市都市緑化協会、しが棚田ボランティア事務局、野洲市市民生活相談課、小倉山百人一集の会)のボランティア紹介を行った。また、「ボランティアとは?」の展示や、「一緒に行こうキャンペーン」という目的で、学生スタッフと一緒にボランティアに行こう!と広報した。
- ・災害を見つめる扉(復興支援活動紹介)  
東日本大震災復興支援活動の説明、2011年～2015年の活動内容、活動時の写真や参加者の想い、活動先である宮城県石巻市雄勝町について(名産品の紹介、雄勝小学校から学ぶ教訓)、ネパール大地震と龍谷大学の支援に関して龍谷大学が行ってきた支援活動について紹介した。

### ・実感の扉（体験ブース）

様々なサイズの地図を用いて、ボランティアマップやオススメの場所マップを来場者と一緒に作り、その作成のやりとりの中で、来場者と学生スタッフの共感を図った。

#### 〈模擬店〉

#### ・出展物：タンドリーチキン

販売数：630食

売上金：191,300円 収益：90,998円

売上金から必要経費を差し引いた収益を、新規学生スタッフ企画に譲渡し有効活用する。



### 3. 参加者の声

#### 〈展示〉

- ・復興支援活動紹介の展示を見て、自分も現地に行きたいと思った。
- ・ボランティアは身近に存在するのだと知り、誰にでも参加する機会はあるのだと思った。
- ・センターは思っていたよりも、多くの活動をしていることを知って驚いた。
- ・体験ブースでの地図を使った来場者参加型の展示は面白かった。
- ・ボランティアには様々な活動があることを知り、是非ボランティアに参加したいと思った。
- ・ひとつひとつのボランティアに対して、真剣に向き合う学生の姿勢に感動した。

#### 〈模擬店〉

- ・タンドリーチキン、辛かったけど美味しかった！
- ・美味しかったので、何個も買いました。

### 4. 得られた成果

- ・アンケートの結果から、センターの活動内容や活動理由について知ってもらうことができた。
- ・多くの来場者からボランティアに対するイメージが変わったと意見をもらった。
- ・学生スタッフ自身も、ボランティア観や社会

課題について考えるきっかけになった。

### 5. 学んだこと・今後の課題

#### 〈展示〉

- ・目標来場者数（300名）には届かなかったが、龍大生、他大生、瀬田地域の方、登録団体の方など、来ていただいた方にセンターを認知してもらおうとともに、活動内容について知ってもらうことができた。一方で、会場での資料配布不足や、当日の広報活動が不十分だったため、うまく来場者を呼び込むことができなかったという反省点も挙げられた。チラシ配りの工夫や、配布資料の打ち合わせが必要だと痛感した。
- ・来場者とのやり取りの中で、学生スタッフの想いを伝えるとともに、来場者のボランティア観の変化を聞いたり、来場者の方からボランティアを紹介していただいたりと、来場者の声をたくさん聞くことができた。また、ポスター漫画形式でのセンター紹介や付箋を使った来場者参加型の展示、ぐるぐる回る立体的な仕掛けを使ったボランティア紹介に関して、「この考え方は面白い」「こんなボランティアもあるんですね」など、様々な工夫を凝らした展示を見て共感できたと来場者からコメントをたくさんいただいた。学生スタッフからの一方通行の説明でなく、来場者とのコミュニケーションを積極的にとるよう働きかけたことで、来場者と共感し合うことができた。



- ・展示の内容を工夫し、制作から当日まで意欲的に活動したことで、学生スタッフ一人ひとりが自身のボランティア観を見つめなおしたり、社会問題への興味・関心・理解を深めたりすることができた。しかし一方で、制作や当日の動きで、学生スタッフによって負担の

差が生じたことが反省点として挙げられる。また、制作スケジュールの把握を企画メンバーのみで共有することが多かったため、学生スタッフがどの範囲まで一緒に制作するか困る場面も見られた。今後は進行具合をカレンダーなどで可視化し、全員で協力できる工夫をしていきたい。毎年のことだが、計画性を持って活動することの大切さを痛感した。

- ・学生スタッフの活動に対するモチベーションは人それぞれであるが、今回の龍谷祭で個々の想いに共感する機会を作ることができたと思う。一人ひとりの価値観を大切にしながら、今後の活動に活かしていきたい。

〈模擬店〉

- ・待ち時間を利用して、センターの広報や、展示に関する広報活動が十分に行えなかった。時間を有効活用するためにも、企画メンバーが臨機応変に対応していきたい。
- ・売上金の使い道を決めるのに時間がかかり、全体的な遅れにつながってしまった。企画メンバーでの話し合いで計画性をもって進めることが必要である。

## 6. 展示経費

消耗品 2,732円  
模擬店経費については売上金から支出

〈報告者：中原 茜〉

事業名	夕照コンサートでの東日本大震災復興支援活動の展示と模擬店出店
日時	2015年8月29日（土）13時00分～20時00分
場所	瀬田キャンパス SETADOME
実施主体	夕照コンサート実行委員会
参加人数	10名（学生スタッフ10名） 来場者約1900名、演奏者約900名、運営スタッフ約370名 合計約3170名
企画メンバー （学生スタッフ）	小川菜緒（社会4） 野中美華（理工3） 後藤和成（理工2） 長友沙樹（社会2） 中原 茜（社会2） 藤澤昂也（理工2） 渡邊祐斗（理工2） 多田涼太（理工1） 森岡尋仁（農学1） 矢野佑磨（理工1）

## 1. 経緯・目的

### 【経緯】

夕照コンサートは瀬田学舎開設5年目の1993年から始まり、今年で22回目を迎える。地域住民と音楽を通じた交流を行うことで、地域の活性化や青少年の健全な成長を育むことを目的にしている。本学の吹奏楽部だけでなく地域の小中学校、高等学校の吹奏楽部も多数出演している晩夏の恒例行事である。今年初めて中央執行委員会から模擬店出店の呼びかけがあり、学生スタッフが地域住民との交流に力を入れたいと賛同したことから、今回夕照コンサートに出店することとなった。

### 【目的】

- ①センター来場者にセンターの存在を知ってもらい、センターを利用してもらうきっかけにする。
- ②東日本大震災の復興支援ボランティア活動の

状況を展示することにより来場者に復興支援ボランティアのことや、現在の復興状況について知ってもらう。また、模擬店と連携することにより、模擬店で商品を買うことによって、直接被災地に行かなくても、復興支援に貢献できているということを実感してもらう。

そして、8月の復興支援活動に参加した学生が体験談や思いを伝える場とする。

- ③日々の活動においての学生スタッフ同士のチームワークを高めるきっかけをつくり、それを夏合宿や龍谷祭などの今後の活動に活かす。

## 2. 概要

### ①パネル展示

- ・これまでの復興支援活動（2011～2015年 計14回）

- ・oh! ガッツ!雄勝♪ ～雄勝の今を伝えたい～
- ・あげたいやきに込めた思い

## ②模擬店出店

販売物「あげたいやき」

- ・売り上げ：30,100円 計：200食
- ・収益：16,226円

収益は東日本大震災復興支援プロジェクトへ寄付。

- ・販売物と一緒にメッセージカードを渡すことで、自分たちの思いや、利益の用途を知ってもらえるよう努めた。



## 3. 得られた成果など

- ・センターのパンフレットを約100部配布でき、展示が出入り口近くで行うことができたことにより、多くの来場者の目につきやすく、復興支援活動などの活動を龍谷大学で行っていることを知ってもらえた。しかし、目的①の達成まではできなかったと思う。

- ・パネル展示では写真中心の見やすい展示にできた。また事前に勉強会を行ったことで、興味を持ってくれた来場者にはしっかり説明することができた。さらに説明の中で多様な来場者と交流でき、話が聞けたことで勉強になった。パネル展示を行うことで、興味を持ってくれた方に石巻市の物産品販売も見てもらえた。模擬店で販売したあげたいやきは、リピーターがたくさんあり、完売することがで



きた。また、ただ販売するだけでなく、メッセージカードの説明を行うことで、利益の用途について知ってもらい、パネル展示を見に行ってもらうことができた。

これらのことから目的②は達成できた。

## 4. 学んだこと・今後の課題

- ・企画メンバー同士や、センター職員（コーディネーター）と企画メンバー間での情報伝達がうまくいかないことや、配布物や展示内容への理解が甘い点、またコンサート中は大音量のため展示の説明ができる環境ではなくなることが、想定できていなかった。さらに事前広報があまりできなかった。

これらのことにより、情報伝達手段の改善、説明を積極的に行えるように、事前の展示内容の理解、実際このイベントを体験したことのある人に関わってもらい、または助言をもらうなどの対策、広報にSNSを積極的に活用すべきだったと学んだ。

- ・準備期間が短く時間がない中でも企画メンバーで協力できていたが、企画メンバーに負担が集中し、企画メンバー以外の学生スタッフがほとんど参加しないなど、「学生スタッフ同士のチームワークを高めるきっかけをつくり、その今後の活動に活かす。」という企画の趣旨・目的から離れてしまっていた。この点も踏まえ、来年度は学生企画として行うのか、どのような方法で関わるのか、再検討が必要である。

## 5. 経費 なし

売上は第2回東日本復興支援ボランティア活動に寄付

〈報告者：後藤 和成〉

事業名		サークル活動・ボランティア活動 情報交換会 & 地域活動支援	
サークル情報交換会	キャンパス	深草キャンパス	瀬田キャンパス
	実施日時・参加人数	2015年5月14日(木) 7団体12人 2015年7月8日(水) 5団体8人 2015年9月25日(金) 1団体6人 2015年11月18日(水) 3団体9人 2016年1月12日(火) 3団体5人	2015年5月14日(木) 5団体10人 2015年7月8日(水) 3団体4人 2015年9月25日(金) 5団体7人 2015年11月18日(水) 5団体8人 2016年1月12日(火) 1団体1人
		いずれも 12時30分～13時00分	いずれも 12時50分～13時20分
	場所	ボランティア・NPO 活動センター	ボランティア・NPO 活動センター
登録団体		学術文化局 交響楽団 学術文化局 ボランティアサークル 学術文化局 マンドリンオーケストラ 学術文化局 龍吟会 京炎そでふれ! 輪舞曲 ジャズ研究会 手話サークル 国際ボランティア学生協会 Broadway Musical	アカベラサークル MOUSA アコースティックギターサークル 音×音 華舞龍 Sept Couleur 社会福祉研究会 S.W.A.P 手話サークル D.A.Y White Board マジック&ジャグリングサークル Mist
		計9団体	計8団体
活動支援	依頼件数	4件	45件
	調整件数	10件	66件
	成立件数	33件(合わせて)	
実施主体		ボランティア・NPO 活動センター	

## 1. 経緯・目的

学内のサークルを育て、ボランティア活動の促進を目的とし、学内サークルとの連携強化、学内でのセンターの認知度向上、サークルの地域活動のサポートなどを目指している。

## 2. 概要

### ①サークル登録制度

地域の諸団体からの「サークルを紹介してほしい」などの依頼に対応するため、学内のサークル(宗教局、放送局、学術文化局、体育局、各種委員会や一般同好会)のうち希望するサークルが登録を行っている。※ボランティア活動以外のサークルも登録対象。

### ②サークル情報交換会

年間5回、各キャンパスで実施し、サークル同士のネットワークづくりやサークルの活動に役立つ情報提供を行っている。

具体的にはセンターの活動紹介、助成金の情報提供、サークルの特技を活かした地域でのボランティア活動などの説明を行い、新規登録の呼びかけも行った。

### ③サークルへのボランティア活動支援

自治会・子ども会・老人会等の住民組織、社会福祉施設等からのボランティア活動、ボランティア出演の依頼に対し、各サークルへのボランティアコーディネートを行った。

### 3. 参加者の声・得られた効果など

サークル情報交換会への参加サークルからは、「地域での発表の場を紹介してほしい」「助成金に応募して今後の活動に活かしたい」などの声があり、ボランティアコーディネートや、助成金の情報提供を随時行った。

サークルを紹介した地域団体からは、「学生の活動でイベントが盛り上がった」など学生たちが地域の期待に応えて頑張っている様子がうかがえた。一方、サークルの学生からは「初めてボランティアをしたが、喜んでもらえてうれしかった」「地域の役に立ったという実感が持てた」などの感想が寄せられた。

### 4. コーディネーター所感

今年度も登録サークルが、それぞれの活動を

活かし、活躍しました。地域でのボランティア活動は、日頃の成果を幅広い世代に伝える場となり、サークル活動の幅を広げたのではないかと思います。実施後は、双方へのヒアリングを行ったり、SNSで活動内容を発信したりすることもできました。

今後も、サークル情報交換会で有益な情報を

提供し、サークル同士の交流ができる魅力的な集まりになるよう運営していきたいと考えています。

〈報告者：東郷 珠江

（瀬田キャンパス コーディネーター）〉

